

博士論文（要約）

論文題目 三島由紀夫研究

氏名 藤田 佑

三島由紀夫研究 目次

序章	4
第一部 「戦後」への介入 昭和二十四年前後	
第一章 戯曲という方法——『獅子』論	13
第二章 劇と心理小説——『盗賊』論	31
第三章 批評の方法論——三島由紀夫と川端康成	50
第二部 文学論としての小説 昭和二十四～二十八年	
第四章 書くことと演じること——『仮面の告白』論	66
第五章 事件と小説——『青の時代』論	85
第六章 作品と全集——『禁色』と『三島由紀夫作品集』	102
第三部 「三島由紀夫」という物語 昭和二十八～三十一年	
第七章 通俗と芸術の境界——『潮騒』と作家の名前	121
第八章 詩への「回帰」——『ラディゲの死』と『詩を書く少年』	135
第九章 言葉と美——『金閣寺』論	148
初出一覧	170

本文

五年以内に出版予定

参考文献一覧

【論文全般】

『決定版三島由紀夫全集』（新潮社）

『三島由紀夫全集』（新潮社）

島崎博・三島瑠子編『定本三島由紀夫書誌』（薔薇十字社、昭47・1）

長谷川泉・武田勝彦編『三島由紀夫事典』（明治書院、昭51・1）

松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』（勉誠出版、平12・11）

【同時代資料・新聞雑誌記事等】

青山光二・高山毅・八木義徳・豊田三郎「創作合評」（『文芸時代』昭23・5）

浅見淵「文芸時評」（『文芸首都』昭23・9）

天野貞祐・谷川徹三「自由と幸福」（『婦人公論』昭22・1）

荒正人「異常心理でない」（『凶書新聞』昭24・7・3）

荒正人「恐るべき若者―戦後青年の二つの型」（『夕刊新大阪』昭25・7・9）

荒正人『小説家 現代の英雄』（光文社、昭32・6）

伊藤整「川端康成の芸術」（『文芸』昭和13・2）

臼井吉見・平野謙・高橋義孝・十返肇「今年の問題作を語る」（『文学界』、昭28・12）

浦島龍太郎ほか「大波小波特集 文壇一年ざっくば乱③」（『東京新聞』夕刊、昭29・12・

26）

江口清『レイモン・ラディゲと日本の作家たち』（清水弘文堂、昭48・4）

江藤淳「詩人の肖像」（『日本の詩歌』23、中央公論社、昭43・6）

大島兵八・逸見愚永「小説診断書」（『文学界』昭29・8）

岡本太郎・花田清輝・加藤周一・野間宏・佐々木基一「座談会」悲劇について」（『綜合文

化』昭23・3）

奥野健男「にせナルシズムの文学―三島由紀夫論」（『文学界』昭29・3）

奥野健男「文芸時評」（『三田文学』昭29・4）

小高根二郎『詩人、その生涯と運命』（新潮社、昭40・5）

小高根二郎『詩人伊藤静雄』（新潮社、昭46・5）

桂芳久「福永武彦著『草の花』 中村眞一郎著『夜半楽』 三島由紀夫著『潮騒』（『近代文

- 学」昭29・11)
- 亀井勝一郎「文芸時評」(「中部日本新聞」昭29・12・26)
- 川端康成「序」(三島由紀夫『盗賊』真光社、昭23・11)
- 川端康成「鳶の舞ふ西空」(「新潮」昭45・3)
- 河盛好蔵・神西清・中村光夫・福田恆存「座談会」文壇・ジャーナリズム・作家」(「文学界」昭25・12)
- 河盛好蔵編「文芸用語辞典」(「文芸」昭26・1)
- 岸田國士「創刊にあたって」(「演劇」昭26・6)
- 岸田國士・福田恆存・小林秀雄・三島由紀夫・木下順二・中村光夫「座談会」文学と演劇」(「展望」昭25・11)
- 木村庄三郎「八月の作品に就いて(一)」(「時事新報」大14・8・7)
- 吳茂一「ギリシアの歌妓」(「婦人公論」昭23・8)
- 小林秀雄・三島由紀夫「美のかたち―「金閣寺」をめぐる」(「文芸」昭32・1)
- 沢井潔「三島由紀夫論」(「近代文学」昭29・12)
- 澁澤龍彦「一種のユートピア小説 三島由紀夫著『午後の曳航』」(「週刊読書人」昭38・10・31)
- 神西清「ナルシシズムの運命」(「文学界」昭27・3)
- 武田泰淳「三島由紀夫「青の時代」」(「人間」昭26・1)
- 武田泰淳「解説」(『「新潮文庫」盗賊』新潮社、昭29・4)
- 武田泰淳「小説案内(下)」(「毎日新聞」29・6・26)
- 武田泰淳・瀧井耕作・河盛好蔵「創作合評」(「群像」昭26・2)
- 田中美知太郎「幸福について」(「婦人公論」昭21・6)
- 戸坂康二「往復書評 三島由紀夫著「盗賊」」(「読書倶楽部」昭24・2)
- 寺田竹雄・林健太郎・鈴木重雄・浦邊史・稻村耕雄「座談会」妻の自由と幸福のために」(「婦人公論」昭23・8)
- 寺田透「三島由紀夫論」(「群像」昭28・10)
- 十返肇「七月号文芸・総合誌の小説」(「京都新聞」昭29・7・3)
- 十返肇「文壇天気図」(「中央公論」昭29・9)
- 十返肇「倦怠期だった今年の文壇」(「日本経済新聞」昭30・12・30)
- ドナルド・キーン「三島由紀夫著『潮騒』」(「文芸」昭29・9)

- 中河与一「文壇波動調」(「文芸時代」大14・10)
- 中島健蔵・高見順・豊島與志雄「創作合評」(「群像」昭22・11)
- 中野好夫「創作合評」(「群像」昭24・11)
- 中村眞一郎・加藤周一・三島由紀夫ほか「座談会」二十代座談会「青春の再建」(「光」昭22・12)
- 中村眞一郎「文芸時評」(「中部日本新聞」昭29・6・24)
- 中村光夫「独白の壁―椎名麟三氏について」(「知識人」昭23・11)
- 中村光夫「丹羽氏に答う」(「東京新聞」昭24・10・27、28)
- 中村光夫「文芸時評(下)」(「新大阪」夕刊、昭25・12・28)
- 中村光夫「批評の動向」(日本文芸家協会編「文芸年鑑」昭和二十六年年度版、新潮社、昭26・6)
- 中村光夫「展望」(「展望」昭26・2)
- 中村光夫『金閣寺』について」(『新潮文庫』金閣寺』新潮社、昭35・9)
- 中村吉蔵『希臘悲劇六曲』(東京堂書店、大11・8)
- 新関良三『希臘・羅馬演劇史 第四卷 エウリピデス上』(東京堂、昭23・12)
- 西尾幹二「解説」(『新潮文庫』青の時代』新潮社、昭46・7)
- 日本文芸家協会「文芸年鑑」昭和二十九年年度版(新潮社、昭29・7)
- 日本文芸家協会「文芸年鑑」昭和三十年年度版(新潮社、昭30・6)
- 丹羽文雄・井上友一郎・中村光夫・福田恆存・河盛好蔵・今日出海「座談会」批評家と作家の溝」(「文学界」昭24・11)
- 野口武彦『三島由紀夫の世界』(講談社、昭43・12)
- 林暲「人間像の分裂―精神医学者のノート」(「群像」昭24・9)
- 日沼倫太郎「三島由紀夫論」(「文芸首都」昭28・8)
- 平田次三郎「文芸時評」(「進路」昭23・1)
- 平野謙「文芸時評⑦」(「朝日新聞」昭29・2・28)
- 福田恆存『仮面の告白』について」(『新潮文庫』仮面の告白』昭25・6)
- 本多秋五「芸術 歴史 人間」(「近代文学」昭21・1)
- 本多秋五『物語戦後文学史』(新潮社、昭41・3)
- 山本健吉「簡素な古典的形式」(「図書新聞」昭31・11・24)

- 山本健吉『十二の肖像画』（講談社、昭38・1）
- 湯地朝雄「三島由紀夫論―蒙昧主義及びその機能について」（『新日本文学』昭28・8）
- 吉本隆明『言語にとって美とはなにか』第I巻（勁草書房、昭40・5）
- Y「反〃戦後派〃の姿勢整う」（『日本読書新聞』昭25・12・20）
- 若杉慧「書評」三島由紀夫著『潮騒』（『群像』昭29・8）
- アルベール・テイボータ『小説の美学』（白水社、昭和15・5）
- 生田長江訳・ニイチェ『悲劇の出生 附・ワグネルの事件』（赤坂書店、昭22・11）
- 無署名「学生社長（光クラブ）自殺す―三千万円の金策つきて」（『朝日新聞』昭24・11・26）
- 無署名「〃人生は劇場だ〃戦後学生の一典型」（『朝日新聞』昭24・11・26）
- 無署名「新潮社三大「文学賞」発表」（『新潮』昭29・1）
- 無署名「鮮やかなギリシア的造形―三島由紀夫著『潮騒』」（『サンデー毎日』昭29・6・27）
- 無署名「今月のベストセラーズ」（『読売新聞』昭29・7・25）
- 無署名「映倫から注意された脚本」（『読売新聞』昭29・8・26）
- 無署名「タコつりに苦勞―『潮騒』撮影余聞」（『朝日新聞』昭29・9・19）等。
- 無署名「新潮社文学賞 選後評」（『芸術新潮』昭30・1）
- 無署名「日本の小説 アメリカで好調―『潮騒』ベストセラーに」（『朝日新聞』昭31・11・10）
- 【学術論文・研究資料等】
- 天野知幸「詩劇」の試み―「マチネ・ポエティク」、「雲の会」と三島由紀夫「邯鄲」（『日本語と日本文学』平16・2）
- 有馬学『日本の近代4』「国際化」の中の帝国日本1905～1924』（中央公論新社、平11・5）
- 有元伸子『金閣寺』の一人称告白体」（『近代文学試論』平元・12）
- 磯貝英夫「十六歳の日記」（『川端康成の人間と芸術』教育出版センター、昭46・4）
- 井出慎太郎「三島由紀夫『青の時代』論」（『福岡大学日本語日本文学』平16・3）
- 井上隆史『金閣寺』論―想像力の問題』（『三島由紀夫研究⑥』、平20・7）
- 内倉尚嗣「事件から小説へ―「おぼろ夜の話」と「親切な機械」」（『阿部知二研究』平9・

- 4)
岡本和宜「川端康成「十六歳の日記」本文考―「あとがき」の問題」(「皇學館論叢」平16・6)
- 奥野健男『三島由紀夫伝説』(新潮社、平5・2)
- 小笠裕二「真らしいいつはりの自伝―三島由紀夫「ラディゲの死」論」(「イミタチオ」平18・2)
- 小笠裕二「三島由紀夫「獅子」論―デュオニユッスの再生」(「イミタチオ」平18・3)
- 梶尾文武「三島由紀夫『美德のよろめき』論―小説家の明晰」(「国語と国文学」平18・7)
- 梶尾文武「三島由紀夫『仮面の告白』論―書くことの倒錯」(「日本近代文学」平18・5)
- 梶尾文武「三島由紀夫論―イロニーとしての文体」(東京大学大学院人文社会系研究科、博士論文、平22)
- 梶尾文武「三島由紀夫『潮騒』論―可視性の領海」(「東京大学国文学論集」平23・3)
- 梶尾文武『否定の文体 三島由紀夫と昭和批評』(鼎書房、平27・12)
- 川口久雄・志田延義校注『和漢朗詠集 梁塵秘抄』(岩波書店、昭40・1)
- 川島至『川端康成の世界』(講談社、昭44・10)
- 北川晃二「西日本・もう一つの文壇史」『読売新聞』昭61・6・2)
- 許昊『金閣寺』論―手記とモノログの間」(「稿本近代文学」平9・12)
- 久保田裕子「氾濫する贋物、堆積する言葉―三島由紀夫『青の時代』の周辺」(「淵叢」平4・3)
- 河野龍也「金閣寺」(安藤宏編『日本の小説101』新書館、平15・6)
- 佐藤秀明『三島由紀夫の文学』(試論社、平21・5)
- 島弘之「批評家を嫉妬させる「私」―『仮面の告白』について」(「群像」昭63・6)
- 杉本和弘「(私)の手記という方法―『金閣寺』の場合」(「名古屋近代文学研究」平2・12)
- 杉本和弘「仮面の告白」論―園子との物語をめぐって」(『三島由紀夫論集』2、勉誠出版、平13・3)
- 武井・トゥンマン・典子『盗賊』―ラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』との接点を通して」(『三島由紀夫の表現』勉誠出版、平13・3)。
- 田中美代子『鑑賞日本現代文学23 三島由紀夫』(角川書店、昭55・11)
- 田中美代子「さまざまなる変容―「禁色」序説」(『三島由紀夫論集』1、勉誠出版、平13・3)
- 田中裕也「三島由紀夫「青の時代」の射程―道徳体系批判としての小説」(「昭和文学研究」

平 24・3)

千葉俊二・坪内祐三『日本近代文学評論選 昭和篇』(岩波書店、平 16・3)

鶴田欣也『芥川・川端・三島・安部―現代日本文学作品論』桜楓社、昭 48・6)

東郷克美「金閣寺」―監獄のなかのエクリチュール」(『国文学』平 5・5)

登尾豊「十六歳の日記」と「故園」その他」『川端康成研究叢書 1』教育出版センター、昭 51・8)

西垣脩「伊藤静雄」(『現代詩鑑賞講座』第十卷、角川書店、昭 44・1)

新田博衛『金閣寺』の方法―覚書風に」(『理想』昭 52・10)

花崎育代「永劫回帰」を超えて―「武蔵野夫人」論」(『昭和文学研究』平 4・2)

花崎育代「三島由紀夫『潮騒』考―麻績王とデキ王子」(『湘南短期大学紀要』平 10・3)

日高佳紀「交換と模倣―『禁色』における〈対話〉の回路」(『三島由紀夫研究⑤』平 20・1)

三浦雅士「距離の変容―三島由紀夫の世界」(『海燕』昭 57・5)

三好行雄「三島由紀夫」(『解釈と鑑賞』昭 35・9)

三好行雄「背徳の論理―『金閣寺』三島由紀夫」(『作品論の試み』至文堂、昭 42・6)

山本起世子「民法改正にみる家族制度の変化―1920年代〜40年代」(『園田学園女子大学論文集』平 25・1)

山本芳明『カネと文学 日本近代文学の経済史』(新潮社、平 25・3)

松本徹『NHKカルチャーラジオ 文学の世界 三島由紀夫を読み解く』(NHK出版、平 22・

守谷亜希子「三島由紀夫『青の時代』論―「光クラブ事件」を素材とする他作品との比較を通して」(『東京女子大学日本文学』平 18・3)

論文の内容の要旨

論文題目 三島由紀夫研究
氏 名 藤田 佑

本研究は、昭和 20 年代における三島由紀夫の作品史と、それを取り巻いた戦後文学史の動態を、文学の“ジャンル”という観点から構想し、記述することを目的としている。

第一部は「「戦後」への介入 昭和二十四年前後」と題し、戦後文学のスターダムに躍り出る『仮面の告白』までの道程を、敗戦直後の文壇を席卷し、彼もその一角にあった「近代文学」派との距離感を測定しながらたどった。主な対象時期は、昭和 24 年前後である。

第一章「戯曲という方法—『獅子』論」では、三島が戯曲というジャンルに接近していった必然性を検討するために、ギリシア悲劇の翻案『獅子』（昭 23）を取り上げた。本作は演劇的なドラマツルギーを小説に導入し物語を劇に見立てることで、登場人物の内面と、それを表現する描写との不一致をあえて示してみせている。すなわち三島における戯曲への傾斜は、心理という不可視の圏域を書記言語で再現する小説形式への忌避として始まった。本章は、作中人物から発せられる「肉声」のリアリティを理想化する作品の展開に、ロマン主義的な空想の否定という主題を見出し、転向や弾圧を実存主義的に描いた戦後派文学との対決点を明らかにした。三島は戦後

派文学をロマン主義の一種として解釈していたが、同様の発想は中村光夫らの言説にも見られる。戦時下で涵養された自身のセンチメンタリズムを、戦後文学のロマン主義的傾向に投影し、それを討つという方法こそが三島の戦後作家としてのスタートであり、そのために要請された理念こそが戯曲であった。

第二章「劇と心理小説—『盗賊』論」では、「戦後批判」というステレオタイプから敗戦後の諸作を解放するために、最初の長篇小説『盗賊』（昭23）を論じた。本章が目にするのは、疑似的な悲劇の創出に挫折するプロセスとして物語が展開する点、及び本作の作中年代が「一九三〇年代」にある点である。すなわち『盗賊』の主眼は、「一九三〇年代」をすでに美的な死の可能性が喪われた時代に塗り替えることで、戦前的な時間への憧憬を断ち切るところに存する。なお、『獅子』『盗賊』の両作はともにラディゲの文体からの影響が認められるが、戦後における三島のラディゲ認識の興味深い点は、心理小説の手法を戯曲とのアナロジーから捉えた点にある。ラディゲを古典主義作家と見做し、あるべき戦後作家のモデルとして彼を理解した点にも、三島が戯曲というジャンルに接近していく必然性が見出せる。

第三章「批評の方法論—三島由紀夫と川端康成」は、三島の文壇処女評論「川端康成論の一方方法」（昭24）の分析を通して、三島における批評の方法論を検討した。三島が「近代文学」に寄せた本評論は、川端康成『十六歳の日記』を考察した文章だが、作家の実生活を徹底的に度外視し、芸術作品と作家の分断を説くその内容は、「近代文学」派が主導した伝記実証的な作家論とは性格を異にしている。本章は三島のこうした手法から、同時代の「批評」ジャンルへの批判的視角を抽出し、実人生における肉体の欠落という自身の負い目を、芸術論によって解消しようとするその目論見を明らかにした。芸術作品を芸術家の「自我の他者」と見做す本評論の発想は、直後に発表される『仮面の告白』のモチーフを先取っている。

第二部「文学論としての小説 昭和二十四年～二十八年」では、出世作『仮面の告白』が刊行された昭和24年から、最初の作品集『三島由紀夫作品集』（昭28～29）が上梓された昭和28年前後までの期間を扱う。戦後文学のスターダムにのし上がった三島は、旗手としての自覚ゆえか、かつて以上に同時代文学に機敏に反応し、同時代の文学理念を絶えず篩にかけていった。第二部で検討する作品群は、いずれも文学ジャンルそれ自体のメタフィクションとして機能している点に、共通の特徴がある。

第四章「書くことと演じること—『仮面の告白』論」は、三島にはめずらしく一人称によった『仮面の告白』（昭24）の、演劇論としての射程を分析した。書き手である「私」は、性倒錯者

としての呪われた宿命を劇化するため、小説風の叙述の執筆に携わる。しかし一人称小説に必然的にもたらされる「書く現在」と「書かれる過去」の分裂によって、「私」のそうした望みは不履行に陥る。そのために「私」が選択した方法が、演技による自己劇化であった。本章は、一人称小説をめぐる如上のジレンマを解消する手立てとして、本作が「演技」という発想を取り入れていることを論証し、「書くこと」と「演じること」をめぐるメタフィクションとして、この小説を読み解いた。なお、『仮面の告白』からおおよそ一年後の昭和 25 年、文壇と劇壇の交流、小説と戯曲のジャンルの交感を企図して、「雲の会」が結成される。同会に期待を寄せた中村光夫、福田恆存らが、ともに私小説の批判的検討に関与していた点は重要である。

三島が昭和 25 年前後に著した一連の新聞ダネ小説も、文学論としての性格を有している。第五章「事件と小説—『青の時代』論」では、三島の新聞ダネ小説の最初期の作品として知られる『青の時代』(昭 25) を論じた。所謂「光クラブ事件」に取材した本作は従来、アプレ青年への共感、乃至は関心に裏打ちされた、戦後批判の言説として読まれてきた。しかし本作の発表された昭和 25 年前後が、中間小説・風俗小説の興隆期であり、アプレ・ゲール現象の小説化が頻繁に行われていた事実を閑却してはならない。本章では同時期の事件小説に対する三島の批評的視角と、現実の事件を小説に仕立てあげていくそのドラマツルギーを分析した。

『青の時代』連載中に執筆が開始された『禁色』(昭 26~29) は、二十代の総決算と呼ぶに相応しい、長大な構想を備えた長篇小説である。時期を同じくして、三島にとって初となる本格的な作品集『三島由紀夫作品集』全六巻の刊行が始まっている。第六章「作品と全集—『禁色』と『三島由紀夫作品集』」では、作品と文学全集の関係性を視座に、『禁色』を読み解いた。本作の主人公もまた、三度目の全集刊行を控えた老作家であったが、作品と全集の関係性をどう把握するか、三島とこの老作家は対照をなしている。本章では当該時期の三島の「作品」観の分析をもとに、書記言語で自身の生を書き記すことの断念から、三島が作品の外に作家の実体を構築し始めたことを指摘した。なおこの頃から、それまでの小説作品に顕著であった戯曲との交感も影を潜めていく。それはすなわち、三島が小説の外側の実生活の領域で、自身の肉体と実体を露出し始めたからに他ならない。

昭和 31 年、三島は『仮面の告白』以来おおよそ七年ぶりとなる本格的な一人称小説『金閣寺』を著す。第三部「『三島由紀夫』という物語」の目的は、三島にとっては異例ともいえるこの一人称小説を、「三島由紀夫」という作家の、昭和 20 年代におけるジャンル認識の帰結として読み解くことである。この時期の三島は、作家としての出発以来あまり言及することのなかった「詩」

や「詩人」への執着を表明し始めている。同じ頃に開始された肉体の鍛錬という実生活上の変化も補助線として考えるならば、三島は自身を一つの「作品」に化すことを目論んでいる。第三部では、三島が自身の作家イメージを利用し、いわば一篇の「三島由紀夫物語」を巧みに紡ぎ出すプロセスを検証した。

高度経済成長の前夜にあたるこの時期、文学の大衆化という事態に三島はどのように応じたのか。第七章「通俗と芸術の境界—『潮騒』と作家の名前」では、メディア論の手法も取り入れつつ、『潮騒』（昭29）を論じた。『潮騒』は発表以来、現在に至るまで毀誉褒貶が激しいが、それは本作が「三島由紀夫」の書いた作品であるからに他ならない。作家の名前が作品の商品的価値を決定した当時の文学マーケットにおいて、作品の自律的な批評はもはや機能不全に陥っていた。本章は、読者のなかで通俗と芸術という二つのジャンル認識が形成されていくメカニズムと、そうした二分法自体を攪乱する仕掛けが『潮騒』の内部に蔵されていることを、作家の名前の機能に注目することで論証した。

ところで、三島は『潮騒』の発表とほぼ同時期に、十代の「詩人」時代を綴った私小説風の短篇『詩を書く少年』を執筆している。その前年に書かれた『ラディゲの死』（昭28）もまた、自身にとって小説家の理想像であったラディゲを、「詩人」との相関関係から捉え直そうという発想がみられる。第八章「詩への「回帰」—『ラディゲの死』と『詩を書く少年』」は、これら二つの短篇小説に通底する、「詩」と「詩人」の問題を考察した。詩人・コクトーと小説家・ラディゲの対話篇として構成された『ラディゲの死』と、詩人としての挫折を描いた『詩を書く少年』（昭29）は、発する言葉の美しさではなく、存在そのものの美しさをこそ「詩人」の条件に据える発想が共通して見られる。ここで呈示された言葉と美の関係、あるいは芸術家自身の美の問題は、直後に書かれる『金閣寺』の重要なモチーフになる。

第九章「言葉と美—『金閣寺』論」では、昭和20年代における三島のジャンル認識の帰結を、『金閣寺』の解釈によって導き出すことを試みた。伝統的私小説の様式性を取り入れた第三の新人の登場は、戦後文学における一種の古典主義文学運動として捉え得る。ところが三島は、『金閣寺』を境に、自身の作品の特質でもあった様式性を放擲していく。この問題を考える際の補助線となるのは、本作を「詩」と評した小林秀雄、中村光夫らの作品評である。本章は、金閣放火に赴く過程で獲得された「私」の言語観とその記述の分析から、『金閣寺』が「詩」として読まれ得る必然性を検証した。そのうえで、三島が昭和30年代以降「文学」から離れ、時事評論という新しいジャンルに参入していく道筋を考えた。